

地震の発生する確率は、僅か8.1%になってしまう。1361年康安南海地震以降の発生間隔の平均値117年を採用すれば、2025年から30年以内に南海地震の発生する確率は40.9%になる。

以上、発生間隔の3つの例を示したが、どれも世間一般に言われている2025年から30年以内に南海地震が発生する確率は80%にはならない。最大でも前節で示した通り44.6%である。80%という高い発生確率は特別な条件を設定しないと出てこない。

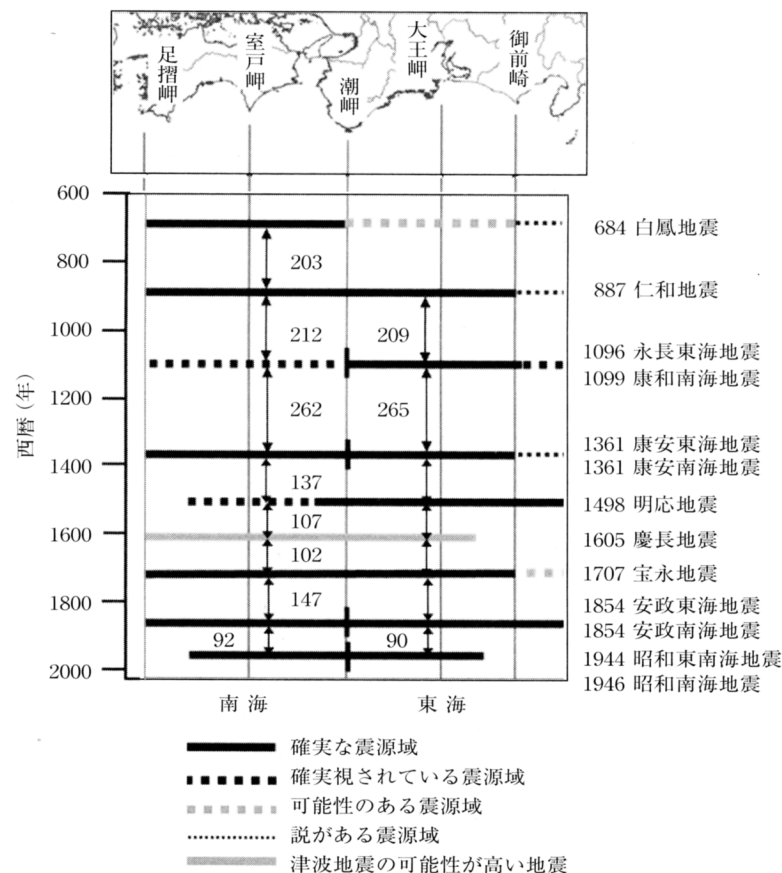


図17-2 繰り返り起きている南海トラフ地震

地震調査研究推進本部 地震調査委員会(資料 地-1)「2013(平成25年)南海トラフの地震活動の長期評価(第二版)について」のP10 図2を参考に加筆。

17.1.3 時間予測モデルの採用

特別な条件とは地震発生時期を予測できるという「時間予測モデル」を採用したことである。モデルの詳細は17.2.2項で紹介するが、ここではこのモデルを採用した場合の南海地震の発生確率を求める。

島崎邦彦(1994)は、高知県室戸市の室津港での水深が南海地震のたびに浅くなることに注目し、過去3回の南海地震時の水深の変化を土地の隆起量と考えて表17-1に示した値を得た。宝永と安政南海地震については古文書の記載から、昭和南海地震については実測値から隆起量を得ている。

表17-1 地震発生間隔と島崎(1994)による室津港の隆起量

地震名	発生年	発生間隔(年)	室津港隆起量(m)	積算値(m)
慶長	1605	—	—	—
宝永	1707	102	1.8	1.8
安政	1854	147	1.2	3.0
昭和	1946	92	1.15	4.15

この隆起量を、南海地震の起こった年度に積算していくと、図17-3に示したように階段状の図ができる。図で安政と昭和の階段の下を結ぶと、13 mm/年と記した斜めの直線を引くことができる。この直線と前回の昭和南海地震の積算値との交点が次の南海地震の発生年と予想される。交点は前回の南海地震から88.2年後の2034.2年となる。

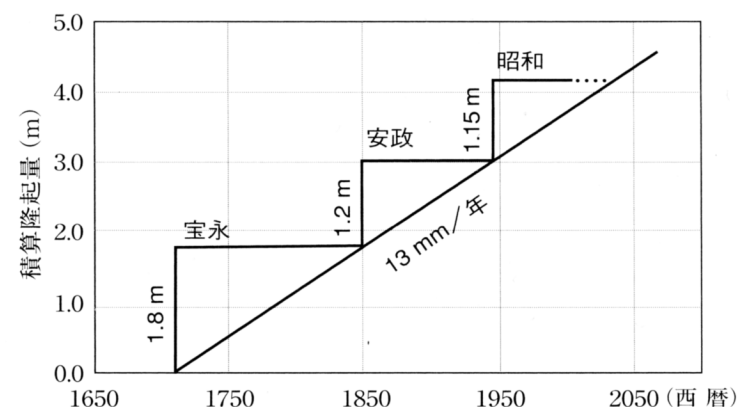


図17-3 室津港の南海地震時の積算隆起量

地震調査研究推進本部 地震調査委員会(資料 地-1), 2013「南海トラフの地震活動の長期評価(第二版)について」のP92 図4-3を参考に作図。隆起量は表17-1による。